

辛亥革命記念空間と観光施設

— 東南アジアとアメリカを題材として —

櫻井良樹

1. はじめに

筆者は先に、羅福恵・朱英主編『辛亥革命の百年記憶と詮釈』の書評を書いた⁽¹⁾。この全4巻にわたる書は、辛亥革命や孫文がどのように位置づけられてきたかを、政治情勢、社会情勢、学術研究の各側面から、あるいは政府・民間社会・研究者それぞれの立場から見た総合的な研究史であった。特に第4巻『記念空間と辛亥革命百年記憶』では、墓地、記念館、故居、旧址、公園など各種にわたる記念空間・記念物に注目して、それが出現した歴史的経緯や政治・社会的意味づけを行っている。本稿は、この著作に触発されて現地調査をした書評の続編と訪問記を兼ねたような報告である。なお本稿では中国語の文脈および固有名詞として使用されている場合は、記念・孫中山を用い、それ以外の場合には記念・孫文を使用している。

筆者は近代日本史を研究フィールドとするが、辛亥革命と日本政治・外交との関係を追究する過程で、あるいは宇都宮太郎関係史料の整理を通じて、日本における孫文や黄興など革命運動で活躍した人物、反対に革命運動を抑圧する立場に立った北洋軍閥関係の人物などに興味を持った（研究したわけではない⁽²⁾）。そして彼らに関する史跡についても、つとめて見学するようにしてきた。

最近の歴史学界においては、歴史を意味づけていく行為をめぐる議論が流行している。それは大きく言えば歴史認識の問題であるが、具体的には世界遺産や世界記憶遺産の認定問題や個々の記念碑や史跡・事績にまで及んでいる。地域観光開発の視点から官民あげて世界遺産や記憶遺産への認定をめざす活動がなされているが、遺産のどこに注目するかをめぐって国

際問題化したことは記憶に新しい。歴史的意味づけは多様性を包蔵しており、そのどこを強調するかをめぐっては、問題になりやすい。

筆者のような興味本位からの史跡めぐりは、一種の観光行為であるが、同時に史跡・記念物が与えられている政治的意味に動員させられている行為と見なされてもしょうがない。ただなぜそこに記念物があり、どのように意味づけられているかを知ることが、無自覚的に政治動員されるのとは、やはり違う。

筆者は一昨年（2014年）夏に、Braunau am Inn というオーストリアの町を訪ねた。ザルツブルグから、途中から各駅停車する列車に約2時間揺られて、そのドイツ国境の町をめざした。ある建物を見にいくためであった。その建物の前には石碑があり、表に「FÜR FRIEDEN FREIHEIT UND DEMOKRATIE, NIE WIEDER FASCHISMUS, MILLIONEN TOTE MAHNEN（平和・自由と民主主義、2度とファシズムは必要ない、何百万の死者を忘れるなかれ）」と書かれている。裏には、この石がマウストハウゼン強制収容所から運ばれて来たものであることがわかるように、「STIN AUS DEM KON ZENTRATIONSLAGER MAUTHAUSEN」と刻まれている。「戦争とファシズムに対抗する記念碑」と言うそう（説明板はない）。これはヒトラーの生家であり、筆者が訪れたのは、世界における慰霊碑・記念碑調査の一環であった⁽³⁾。



図01 ヒトラー生家

その場にしばらくいると、時々十数人のグループがやってきて、この建物を見学して去って行く。観光ポイントの一つであることがわかる。最近ではブラック・ツーリズム（ダーク・ツーリズム）という、人類の負の遺産をめぐる観光旅行もあるらしい。反対にネオ・ナチのヒトラー崇拜者だったら、生地を訪問する

という行為は、巡礼のような神聖な意味を持つだろう。もっとも昔から巡礼行為は、転じて観光でもあったから、この場所を訪れる行為は、石碑の文字を眺めて歴史の教訓をかみしめても、あるいはその反対であっても、観光行為につながっているという点では、外面的には区別はつかない。ただこのハウスが歴史現場であり、歴史の何事かを象徴していることは変わらない。

2. 辛亥革命を海外で記念することの意味

話が横道に入ってしまったが、本稿では、辛亥革命関係の記念物が、どのような機能を果たしており、観光資源となる可能性について、中国以外の地域を題材にして考えることを課題とする。『記念空間と辛亥革命百年記憶』の第12章「海外辛亥革命記念空間」（劉伝吉・冀暁雷・丁広義執筆、以下「海外記念空間」）では、日本・東南アジア・欧米（イギリス、アメリカ・カナダ）の革命関係史跡が取りあげられている。

たとえば日本については、世界中でもっとも革命ゆかりの地が多く、革命家や孫文に関係する史跡が残されており、その多くが在日華僑の人々だけでなく、日本の民間人によっても保護されてきたことが指摘されている。これは革命運動を助けた日本人が数多く存在したことによる⁽⁴⁾。日本人の関わりを記念するという意味では、国内的なものであると言えよう。しかしその存在が、最近とみに対立が厳しくなっている日中関係の中で、両国民友好の場という機能を持たされていることも事実であり、そういう点では両国民共通の遺産となり得るものであるとも言える。

これに対して、アメリカにも革命関係の記念物はあるが、そのほとんどは華人の多い地域に、華人によって作られ保護されている。これは革命に対する資金援助活動を在米華僑が行ったという歴史をふまえた活動による。だがそこにはアメリカ人は登場せず、したがって米中友好の場という意味合いは薄い。革命を応援したホーマー・リーのようなアメリカ人がいなかったわけではない。でも、その活動がアメリカにおいて記念されたということは聞かない（後述）。

東南アジアにも、革命関係の史跡が多くある。その多くも華僑関係だ

が、こちらは資金援助だけでなく、革命活動そのものの場でもあった。その代表例がシンガポールの孫中山南洋紀念館（晚晴園）で、ここは民衆教育と観光をメインとする記念空間となっていると「海外紀念空間」は言う。そして現在でも華僑たちが記念式典を行う重要な場所となっており、今後も華僑たちの中華民族としての帰属意識を高めることに積極的な役割を果たすことになろうとも述べられている。つまり華僑たちの巡礼場所の一つとなっているわけだ。ここで対象として想定されているのは、在外華僑、大陸および台湾の中国人のようである。

王曉秋⁽⁵⁾によると、辛亥革命前に孫文は、日本に5年、南洋に4年居住し、平行して革命の基地としていた。その日本と東南アジアでの革命活動を比較すると、①革命団体を創始し党人の革命基地とした点、②講演・宣伝活動、書籍・新聞などを発行した点、③武装蜂起の計画を立てた点で共通していたが、革命工作の重点は異なっていたという。それは①当初日本でも在日華僑を工作の対象としていたが、後には留学生を対象とするようになったこと。これは戊戌政変後に、多数の改良派が日本に亡命するとともに、多くの留学生が来日したのに対して、東南アジアは終始華僑が工作の重点であったことが関係している。また②日本では政府と各界人士・大陸浪人に働きかけがなされ、興亜思想に呼応する動きが見られたが、東南アジアでは、そのような働きかけはなかったわけではなかったが、効果はなく、したがって革命資金の調達と植民地からの解放を求める団体に接近したという。そういう経緯から東南アジアでも、革命運動を記念する担い手は華僑であった。

「海外紀念空間」の著者は、その論文全体を通じて、上述したように辛亥革命および孫文関係記念物が、華人を結集させるシンボルの役割を果たしており、海外の華人は辛亥革命記念空間を歴史文化資源とし記念活動を行うことによって民族意識を高めていると描いている。

それが通用するための前提として、辛亥革命の歴史的な位置づけを確認しておく必要がある。台湾（中華民国）にとって、辛亥革命および孫文は、歴史的に決定的な意味を有する。革命の結果、中華民国が建国され、孫文は国父として尊敬されている。もっとも、台湾化が進行した1990年

代には、その動きは抑制的となった。複雑なのは中華民国を否定して1949年に成立した大陸の中華人民共和国である。『紀念空間与辛亥革命百年記憶』第1章「国家对辛亥革命紀念空間的定位」によると、新中国は孫文の革命に対して、半分肯定、半分否定のような態度であった。革命を不十分なものとしながらも、次の毛沢東による革命に至る一里塚としての意義を認めるというものだった。辛亥革命50年にあたる1961年に、国務院は全国重点文物保護單位を定めた。その中には辛亥革命関係の史蹟もかなり多く含まれていた。たとえば黄花崗72烈士墓や武昌起義軍政府旧址、中山陵などで、地域的には華中・華南のものが多く、黄興や秋瑾の故居などの重要人物に関するものもあった。それにより湖北省や南京で、遺跡の保護や修築も開始された。しかしこの動きは文化大革命により中断され、逆に各地の記念物が破壊されるようなこともあった。

改革開放後になると、再び辛亥革命の意義が高く認められ、2001年に江沢民が「共産党は孫文の継承者」と発言して以後は、辛亥革命関係の記念物の大規模な修復と建設が全国的に進むようになったという。つまり辛亥革命および孫文を称揚することは、大陸・台湾の両者にとって共に好ましいことであり、したがって中華民族のアイデンティティーとなり、民族意識を高める役割を持つということになるというわけだ。辛亥革命記念物は、歴史文化資源や観光資源であるけれど、それ以上に政治的な意味を持つということになる。

ではほんとうに「海外紀念空間」の言うような機能を、辛亥革命記念物は果たしているのか、それを確かめたいというのが、紹介されている施設を筆者が自覚的に回り始めたきっかけであった。さらに「海外紀念空間」の著者は新聞記事やネット情報を利用したようであり、すべての施設について訪れたわけではないようである。そこで可能な限り現地を訪れて、それらの史跡を実際に見て確かめることを思い立った。以下は、その報告である。

3. シンガポールとペナン島

筆者が、東南アジアにおける辛亥革命関係史跡を訪問したのは、2013

年12月のことであった。シンガポールとマレーシアのペナン島だけの短い旅程であったが、ほぼ両所に現在残されている関係史跡を探りあてることができた。

① シンガポール

「海外記念空間」は、シンガポールで中心的な役割を果たしている孫中山南洋記念館の歴史を、次のように説明している。孫文は8回シンガポールを訪れ、1906年に同盟会シンガポール分会を発足させた。記念館の建つ晩晴園が重要なのは、晩晴園に3回宿泊したこともさることながら、最も重要な時期に宿泊し、多くの蜂起が計画された場所であったからであり、孫文没後の早い時期から記念空間となった。1937年に同盟会のメンバーが寄付金を集めて購入し、中華民国政府が管理し、1940年に晩晴園を開館した。その当時は、孫文記念と抗日戦争宣伝の二重の記念空間であった。ところが晩晴園は1942年に日本により占領され、通信営となり活動は中断された。日本敗戦後の1946年に国民党シンガポール支部の事務室となり、1951年からはシンガポール中華総商會が管理した。1964年から1965年にかけて修復され、1966年に孫中山歴史文物展覽館となり、孫文の東南アジアでの活動に関する資料を展示した。ちょうどシンガポール独立の頃である。1994年にシンガポール政府は、晩晴園を歴史古跡に認定し、1996年に孫中山南洋記念館と改称された。1997年から2001年に

かけて、シンガポール中華総商會が修復を行い、2001年11月に正式開館した。開館式には元首相り・カンユー（李光耀）が出席して式を主催した。

記念館は、まず園内に入った（園内ではなく記念館前庭の空地である……筆者）正面の巨石に「孫中山、一箇改変



図02 孫中山南洋記念館

中国命運の人（孫文、中国の運命を換えた人）」というリ・カンユーの揮毫があり、裏面に孫文の「天下為公」の文字が刻まれている。記念館正面には、中山服姿の孫文の座像があり、座像の下に晩晴園の簡単な紹介文が書かれている。広場の前には、黄花崗七十二烈士の内の四烈士の彫刻があり、中国海峡兩岸關係協會會長汪道涵の「烈士樹」、台湾海峡交流基金故會長辜振甫の「仁心果」の文字が刻まれた木彫が置かれている。記念館は二階建てで、五個の部屋、一個のリビングおよび二個の廊下があり、一階は平和室、奮闘室、集思庁と歴史廊下、二階はシンガポール室、南洋室、遺珍室と時代廊下という構成となっている。平和室では晩晴園の過去と現在が、奮闘室ではハワイのホノルルから広州と香港までの孫文の足跡が、入口の大きいリビングと展覧室との間には来訪した外国首脳の写真と揮毫と感想文が、南洋室は辛亥革命と南洋華僑の特殊関係を特筆し、「華僑は革命の母である」という絵が飾られている。シンガポール室は、辛亥革命の当地華人に対する影響、孫文を中心に秘密会議を開催する情景の絵が飾られている。

以上が文献から得られた情報であるが、実際に記念館を訪れたところ、少し違う情報、あるいは補足すべき事情が判明した。まず晩晴園の歴史に関することについては、1949年にシンガポール政府が、ここでの国民党の活動を禁止したことにより中華総商會に所有権が移転されたこと。つまり中華人民共和国の成立により、国民党との関係が断絶させられたらしいことがわかった。また1966年に孫中山歴史文物展覧館が開館された時には、日本占領時代の死者の遺品が展示されており、日本との戦いを記念する側面があった。

また現在の展示構成と内容は、上で紹介されているものとはだいぶ異なっている。これは2011年10月に、リニューアルが行われたことによると思われる。新しい展示は、しっかりした展示で、その中で目を惹いたのは中国、シンガポール、日本を並べた年表に沿った展示であった。筆者が訪問した前の月まで、「海外逢知音」というタイトルで孫文・シンガポールと日本に関する特別展が開催されており、この日本紹介の試みは初めてのものではあったという。その残りなのか判別がつかなかったが、海外華僑



図 03 日本・中国・シンガポール年表

にとって孫文を記念することが日本との関係を考えることにつながるということが、かなり意識された展示になっていた。革命活動を紹介した部分で、孫文の活動拠点の一つが日本であり、孫文を援助した日本人が、有名な宮崎滔天以外にも何人かが取りあげられ、シンガポール華僑と日本人および在日華僑が同志的

であったことが説明されていた。

またシンガポールの歴史を取り込み、それも第二次世界大戦後のかなり後の時期までも扱っており、シンガポールにおける華僑の歴史を現代まで追ったものになっている。大戦中の日本占領時代における抗日運動関係の展示もあったが、これはシンガポール人の体験は中国の体験と重なるということを示すものであろう。館外の記念物として、新たに2005年に作られた「共同記憶の壁」というレリーフも、シンガポールの歴史と大戦中における抗日運動を描いたものであった。シンガポールという国の記憶と華人の記憶を共同の記憶として定位したいということであろう。

いずれにしてもこの記念館が、第一にシンガポールの華僑のアイデンティティーを構築する場であること、それは大陸系・台湾系意識、あるいは共産党・国民党の対立という国際情勢を乗り越えようとしていることは、中国海峡兩岸関係協会会長と台湾海峡交流基金故会長の二つの木彫物が並んでいることが象徴していよう。そして第二に、記念館が華人としてのアイデンティティーのみならず、シンガポール人としてのアイデンティティーを構築しようとする場となっていることである。それがシンガポール史の中における華僑という位置づけである。そして第三が、最近、日本を要素に加えることで、より広い視野を設定しようとする段階に踏み出すようとしていることであろう。これらにより、この場所にますます多くの人

を呼び込むことが可能になると思われる。

② ペナン島

ペナン島はマレーシアの北部、インド洋に面する小島である。小島といっても南の端にある飛行場から北の端にあるリゾート地までは、バスで1時間半くらいはかかる。筆者がめざしたのは、このリゾートではなくて、ジョージタウンという本土側に面した島の中心都市であった。ジョージタウンは、シンガポールと同様に、イギリスの海峡植民地として栄えた歴史を持ち、現在は世界遺産となり多くの観光客を集めている。イギリス東インド会社時代のコロニアル様式の税関や、イミグレーションの古い建物や要塞（コーンウォリス要塞）、キリスト教の教会などがお化粧直しをさせられて観光施設化されている。

また同地には、古くから華僑たちも多く、中国風の寺院もあり、町の雰囲気は全体的に中華街的である。いっぽうでは、イスラム文化やインド文化の影響も大きく、モスクやヒンドゥー教の寺院もあり、夕方になるとコーランが鳴り響く。またタイ風の寺院も見られた。交通の要地として東西文化が混合・融和してきた植民都市としてのユニークな姿が評価され世界遺産に認定された町である。近代日本との関係もあり、町の一角には日本人墓地があり、そこには「唐ゆきさん」たちの墓や、第一次世界大戦中に東南アジア水域の警備にあっていた軍艦最上でスペイン風邪で死亡した水兵たち慰霊碑が並んでいる。

「海外記念空間」は、ペナンと革命運動・孫文との関わりについて、次のように説明している。2つある孫文記念館（孫中山檳城基地記念館と孫中山記念館）の紹介に混乱が見られるようなので、その点を整理・訂正しながら示す。檳城とはペナンのことである。孫文はペナンを3回訪問している。最初が1905年で、このときに小蘭亭クラブで第一回目の演説を行い、1908年にも「満洲清王朝が倒れないと中国は必ずや再び滅びる」という演説を行った。孫文は1910年に、シンガポールからペナンに同盟会の南洋総部を移し、11月13日にペナン会議を開催して黄花崗蜂起を計画し資金を調達した。その時に総部が置かれたのが打銅使仔街120号であ

が本格的であり、展示施設も整備されている。入って正面のホールには、孫文の巨大な座像があり、両側は閲書報社の歴史と孫文のペナンでの活動箇所のジオラマ、展示室は2つで、A庁は孫文と中国国内の革命運動を追った展示で、いくつかの場面がフィギュア模型を使用した最新式の展示であり、B庁は世界での孫文の活動を紹介したもので、ここで東南アジアのみならず、日本やイギリスとの関係についても触れていた。そして展示室の奥に小蘭亭の額が飾られている部屋と会議室がある。



図 05 閲書報社孫中山紀念館

世界各地に存在する孫文記念館のグループには、こちらが参加している。インターネットなどで調べると、ペナンでの孫文の記念館は、「孫中山檳城基地紀念館」がヒットするようになっており⁽⁷⁾、英文で Sun Yat Sen Museum Penang は「孫中山檳城基地紀念館」の方である。これに対して「孫中山紀念館」は、英文で Sun Yat Sen Memorial Center（または Hall）であり、記念館が所有するホームページはまだない。両者間に何か立場の違いに起因するものがあるようであり、マレーシア政府は「孫中山紀念館」をペナンの名所とするよう動いているという。

そしてここで注目したいのは、ペナンにおける革命記念空間が、ジョージタウンの世界遺産の一つに組み込まれているということである。「孫中山史蹟巡礼」というピラが作られ、同じものが町のなかにも立派な看板として立てられており、巡礼地点には、それとわかるような目印が、すべてではないが付けられている⁽⁸⁾。巡礼箇所は 18 あり、順番で示すと以下のような史跡である。1. ペナン閲書報社旧址・小蘭亭クラブ /2. ペナン華人大會堂（孫文が演説した） /3. 三山公所旧址（汪精衛が演説した） /4. 閲書報社の最初の社屋址 /5. 孫中山檳城基地紀念館 /6. 謝德順故居・清朝時代のペナン領事館址 /7. 呉世榮私宅（ペナン同盟会支部会長） /8. 「得昌号」



図06 ペナン孫文巡礼マップ



図07 目印看板

(商社名) /9.「宝成号」(商社名) /10.「吉昌号」(商社名) /11.許生理と許生堂が創世した会社 /12a.『光華日報』旧址 /12b. 鍾靈雨等小学旧址 /13.『光華日報』旧址 /14. 同善学校旧址 /15. 育才学校旧址 /16. 福建女校旧址 /17. 麗澤社・麗澤学校旧址 /18. 益智閱書報社旧址。2つの記念館のほかに、孫文によって創設された新聞社や学校、孫文や他の革命党員が演説した場所、革命運動を支援した人々の会社や集会所など、かなり細かい場所を拾っている。

二つの記念館にも、かなり頻繁に華人系とおぼしき観光客が来ていたので、観光客招致策としては成功していると思われる。町歩きは、この孫中山史蹟巡礼だけではなく、さまざまなアート作品（可愛らしい絵が、町の壁に描かれている）が町のそこらじゅうにあり、それを捜しながら歩くだけで楽しむことができるような仕掛けがあり、ある絵の前には多くの若い世代の観光客であふれていた。

シンガポールにも、晩晴園以外に孫文の革命活動に関係する新聞社や学校・住宅があり、支援者もいた。それらがかつて存在していた場所は判明しているが、ペナンのように、それだけ取り出して史蹟めぐりとして観光化するというようなことは行われていないようである。史蹟の掲示は色々なところにあり、晩晴園とは別なところにあるチャイナ・タウンにもそれはあるが、革命や孫文を特別扱いはしていない。ペナンには、まだ当時の面影がある建築物が残っているが、シンガポールの都市化は激しく変化が大きいことも影響しているかもしれない⁽⁹⁾。

東南アジアには、この他にタイのバンコクには中山記念堂があり、孫文の演説街がある、2008年にできたクアラルンプールの孫中山記念堂は観光名所になりつつあるという。したがって完全ではないが、シンガポールとペナンを見た限りにおいて、東南アジアで孫文および革命記念空間は、現地華人たちを結びつけ、大陸・台湾出身者を結びつける機能を果たしていることは確かなようだ。また観光客を呼び込むことができるシンボルの役割も果たしているように感じた。

4. 欧米の記念空間

① イギリス

では次にアジアから欧米に目を転じてみよう。東南アジアで言えたことが通じるであろうか。「海外記念空間」において、ヨーロッパで言及されているのはイギリスだけである。イギリスには、孫文が長く滞在したことがあり、清国公使館に幽閉されるという有名な事件もあった。その孫文遭難事件を記念した部屋が、現在の中国大使館内にあるという。1933年に開室され、1937年に半身像が設置されたが、その後荒廃し、1986年になって修復されたという。この経過自体が、中国大陸での孫文評価の位置づけの変化と符合している。2006年11月の孫文生誕140周年の際には、在英華僑の招待会が行われたという。

ロンドンにあるもう一つの記念物が、グレイ・イン・ロード (Gray's Inn Road) というロンドン市立大学法学院構内にある孫文のレリーフである。1946年に製作されたもので、遭難事件の前に孫文がこの近くに住



図 08 ロンドン孫文レリーフ

んでいたことによる。作製された経緯は、英中両国の第二次世界大戦時の英中友好関係を記念する目的があり、蒋介石が除幕式に祝電を寄せたという。筆者はこのレリーフを見たが、チャイナ・タウンとは離れており、現在どのような意味づけがなされているかは想像することはできなかった。

② ホノルル

アメリカとカナダにも、孫文関係の記念物がけっこうある。孫文は何回も両国を訪れ、在米華僑に対して革命の必要を訴えて資金を調達した。したがって記念物は、華僑の多い土地に限られる。ハワイ、サンフランシスコ、サンノゼ（国父記念堂 1984 年）、サクラメント、ロサンゼルス（孫文銅像 1966 年）、シカゴ、ニューヨーク（中山記念堂 2008 年）、バンクーバー（中山公園 1986 年、孫文銅像 1993 年）、モントリオール（中山公園と中山堂）などが「海外記念空間」では紹介されている。筆者はこれらのうち、ハワイ、サンフランシスコ、サクラメント、シカゴを訪ねた^{（補註）}。

ハワイは孫文と特に関係の深い場所である。孫文はハワイに 6 回滞在しているが、もっとも長かったのは、革命運動の文脈ではなく、1879 年（13 歳）から少年時代をホノルルで過ごし勉学をした時代である。兄の孫眉がハワイに移住して農場を経営し成功した縁による。まだその頃のハワイはアメリカではなくハワイ王国の時代であった。孫文とハワイとの関係については、しっかりとした研究があり『ハワイにおける孫逸仙：その活動と支援者たち』という書籍も出版されている^{（10）}し、ハワイ孫文史跡ツアーも行われている。なおハワイがアメリカに併合されたことにより、以前からハワイに移住していた人は、アメリカ国籍を獲得することになっ

た。これにより孫文もアメリカ人となる資格を得た。

筆者がホノルルを訪ねたのは2015年2月であった。ハワイの中華街は、ホノルルの中心部にあり、けっこうな規模である。「海外記念空間」の記述は簡素で、かつ重要なことを記していないので、筆者の見学を補足しながら記す。中華街のほぼ南端に「孫中山紀念公園」があり(2007年改称してできた)、そこに孫文像がある。この像は孫中山ハワイ基金によって寄贈された孫文13歳の銅像であり、本を片手に歩く格好をした珍しいものである。

そしてもう一つの孫文像が、中国文化広場の脇にある。これは1984年に台湾高雄の国民党関係者によって建てられたもので、「天下為公」の文字や「三民主義」の文章が青天白日旗デザインの上に置かれている台座に刻まれている。2009年には馬英九総統が献花をした。「海外記念空間」の著者は、場所を興中会の旧地としているが、これは誤りではないけれど、ここが国民党ホノルル支部であることを記していない。中国文化広場にある中国文化センターには、孫逸仙ホールやハワイ・ホノルル興中会紀念堂もあり、広場の真ん中にはアメリカ国旗と青天白日滿地紅旗(中華民國国旗)が飾られている。国民党支部の活動とつながりの深いことがわかる。

ホノルルの中華街の入口にある中華門は、高さ3メートルくらいの小さ



図09 孫文13歳像



図10 文化広場孫文像

なもので「中国城」と記されている。マウナケア・マーケットプレイスというのが、中華街の中心にあり、そこには孔子像がある。この像はハワイに華人が到達して200年を記念して1989年に中華民国僑務委員会から贈られたものである。周辺にはホノルル中山学校もある。二・三階建の建物が多く、表面的には政治色は見られない街並であった。この街並みの中には、孫文の革命活動に関係する場所がいくつかある。そういう場所が、ハワイ孫文史跡ツアーの巡礼地で、孫文の2つの銅像、革命運動で後援した劇場、創設した新聞社や中華学校、そして華人のソサイエティーなどである。中華街以外の場所では、通ったセント・アンドリュース教会なども含まれている。それらは、ほとんど旧態はとどめてはおらず、その場所であるという目印もないが、ホームページなどには紹介記事もあり、簡単に回ることができる。

ハワイには、このほかマウイ島にも、孫中山公園と銅像があるそうだ。これは兄の孫眉が経営した農場があったことによる。

③ サクラメントとサンフランシスコ

次に本土である。筆者が訪問したのは2014年12月のことである。まずカリフォルニア州の州都であるサクラメントは、孫文は訪れたことはないようだが、駅前のブロックが丸ごと中華街である。道を渡った東側が歴史



図11 サクラメント中山記念館内部

地区として観光施設化されており、鉄道博物館や歴史博物館もある。歴史博物館の展示からは、中国系・日系移民たちの活動がよくわかる。中華門には「沙加麵度華埠」と記され、中華会館・孔廟と中華学校・体育館が一つの建物に入っている。ブロックの中央に建てられているのが中山記念館で、その前には孫文の立

像がある。外側の壁には1971年の銘がある「軍人中烈碑」のレリーフがある。中は図書室で、正面に孫文肖像と「博愛」「天下為公」「三民主義」の額、周りの壁際を利用して中国文化と孫文・蔣介石・国民党の展示がなされ、ところどころにアメリカ国旗と青天白日満地紅旗が飾られている。特に大きいスペースで紹介されていたのが黄花崗蜂起の展示であった。こも国民党支部である。

次にサンフランシスコ。ここのチャイナ・タウンは、全米第一の規模で、30ブロックくらいを占める。サンフランシスコには、もう一つ西の方のクレメントという地区にも新しいチャイナ・タウンがあり、それは地元住民のためのものだという。有名な中心部のものは、住民の利用も多いが観光の要素も多い。大きな通りにはビッシリと中華料理店や雑貨屋が並ぶが、少し奥に入ると、まず目に入ったのがビルの上層階あるいは屋上に旗が翻っていることであった。その旗の多くは青天白日満地紅旗であり、対抗するように五星紅旗（中華人民共和国国旗）も翻っていたが、その数は少なかった。ただ奥の方（西側）は五星紅旗が多く、合わせると青天白日満地紅旗が少し多いようだ。堂々と政治的立場を表明し、また宣伝しているようであった（なおクレメントのチャイナ・タウンには旗の掲揚などはなかった）。

孫文はサンフランシスコを4回訪れており、チャイナ・タウンには、孫文を記念するものが、少なくとも3つある。一つは正門の位置に立っている中華門である。門に掲げられている文字は孫文による「天下為公」である。そして坂を上ったSt. Mary's Squareにあるのが、異様な高さの孫文像である（Beniamino Bufano制作）。これは1937年とかなり早い時期に建てられたものであるので、



図12 セント・メリー・スクウェア孫文像

現在各地で見られる孫文像とは見慣れない形である。1937年の林森の銘文がある。1943年に宋美齡がここで行われた記念式典に参加したことが「海外記念空間」には記されている。またこの公園の中央には第一次世界大戦および第二次世界大戦で命を捧げた中国系アメリカ人の慰霊板が設置されており、チャイナ・タウンの慰霊空間の役割を果たしている。

中国国民党アメリカ総支部の建物の中にあるのが金山（サンフランシスコ）国父記念館である。道路の反対側は、中華会館や中国商業センター・中華学校であることから、ここが中華街のセンターであることがわかる。訪問した時期がクリスマス休暇に重なったため、ホールに掲げられている孫文肖像以外は見られなかったが、「海外記念空間」や『孫文記念館館報』⁽¹¹⁾によれば、ここはもともと孫文が1910年に創刊した『少年中国晨报』新聞社の所在地であったところで、停刊（1991年）後の1994年に建てられたものだという。孫文が執務した机と椅子のレプリカや、活動を紹介しており、孫文の半身銅像もある。毎年3月と11月には記念式典を行っている。そばに米国華人歴史博物館や中国文化センターもあったが、これも休みのために見学できなかった^(補註)。

なおサンフランシスコでの歴史史蹟めぐりをするのに役に立つ案内書がある。“Historic Walks in San Francisco: 18 Trails Through the City's Past”⁽¹²⁾というもので、そのチャイナ・タウンの項には、孫文関係のものがいくつか紹介されている。筆者が孫文像のある場所がセント・メリー・スクウェアだということを知ったのも同書による。街には、歴史散歩コースを示す標示がある。

④ シカゴと「アメリカのまとめ」

シカゴのチャイナ・タウンもかなり広く、6ブロックほどある。ここの中華門も「天下為公」の文字の額が吊り下げられたものである。立派なガイド用のリーフレットも出版されている⁽¹³⁾。それには中国文化、チャイナ・タウンのあらましと位置、街の歴史などが書かれ、見所として、中華街パビリオン、中華門、Cermak Road、龍のモニュメント、華人退役軍

人記念碑、中華会館、セント・テレス華人天主教学校、シカゴ華人博物館、孫中山公園、華人基督教聯合会、アラン・リー広場（この人は開国期の駐朝鮮公使）、孫中山紀念館、仏教寺院、セント・テレス教会、培徳中心、九龍壁、華埠広場、譚繼平紀念公園などが紹介されている。中華会館の脇には、やはりアメリカ国旗と晴天白日満地紅旗が掲げられていた。

中山紀念公園は、とても小さな道端の空地を利用した、孫文肖像とブランコがあるだけ小さな公園であった。碑文によると、アメリカ建国 200 年を記念してとあるから、1976 年に建てられたものと推定される。獅子会中華民国総会が贈ったもので、「海外紀念空間」によると、国民党支部が孫文生誕記念の式典をここで行っているという。

英語で Dr. Sun Yat Sen Way、漢字では永活街にあるシカゴ国父紀念館は、2002 年に開館されたもので、これも「海外紀念空間」には記されていないが、国民党中美支部と同じ建物の 2 階に入っている。ここの展示は比較的しっかりしたもので、孫文のシカゴでの活動に関するものは数点しかないが、海外活動に関する資料を中心に生涯が豊富に紹介されていた。50 人くらい入れるホールの壁を利用したもので、サクラメントと同じように、正面には孫文肖像と「革命尚未成功」「同志仍須努力」の額、アメリカ国旗と青天白日満地紅旗、それに辛亥革命の時の革命旗（晴天白日旗）が飾られている。

入館すると、しばらくして 50 歳代くらいの管理人らしき人が話しかけてきた。日本人だと告げると、日本と中国の関係をどう思うかと、答えにくい質問をしてきた。こちらからは台湾出身かと聞いたら、そうではないと言う。そして何も尋ねないのに、「大陸は嫌い、日本は大好き」と言い、シカゴの中華街に大陸系の人が多くなってきたことを案じていた。後から 4・5



図 13 シカゴ国父紀念館

名のグループが入ってくると、荷物を入口に置いていたので、「注意しなさい、〔大陸系の〕中国人だから」と言ってきた。この管理人は、完全に反大陸派だった。国民党支部なので、当然の反応なのだが、アメリカにおける政治的立場の違いに由来する溝の深さを痛感する体験であった。だが海外を訪ねる大陸系中国人が、海外にある孫文記念館を巡礼する動きは、ここが国民党支部であるにもかかわらず遠慮なしに訪れていたことが示すように、ますます加速するであろう。これはアメリカにおいても、東南アジアと同じように、これらの施設が中国人観光客の観光資源になり得る可能性を示している。

さてもう一つの記念館である華人博物館は、新しいが小規模なもので、展示には革命運動や孫文のへ言及はなく、中国人の生活と祭りの紹介が中心であり、歴史としては中国人のアメリカ移民者を、1800年代の開拓者、1970年代の来訪者、そして最近きた人たちの姿にわけてビデオで紹介していた。2つの記念館の関係が気になるところだ。

「海外記念空間」には、国父記念館に、2007年総領事の唐英福が孫文の生涯に関連する図画を寄贈したことが書かれている。そしてこれが「当地中国人は孫文記念空間で孫文記念儀式及その他の活動を行っているが、これらの活動は中国人達を凝集させる中心的な役割を果たしている。中国人の心も又、大陸と繋がっており、大陸各地の辛亥革命記念場所を拜謁したりしている」という結論的文章につながっているわけだが、実際には難しそうだというのが、アメリカを回っての筆者の感想である。

また海外における革命関係の記念物が、国内・海外の華人、両岸の人々を繋げる役割を果たしていることを、「海外記念空間」は、たとえばロサンゼルス孫文銅像の前で開催される毎年孫文命日と生誕日に、ロサンゼルス中華会館傘下の26個の下位会所が挙って集合していること、台湾からの新華僑団体以外に大陸からの社会団体代表や、少数のベトナム、カンボジア、ラオスの代表も参加していることを例に挙げ、それは孫文を継承して中国統一を実現しようとする願望の表れでもあるとまとめているが、これも長期的にはそうなるかもしれないが、現在においてはまだ始まったばかりの段階であろう^(補註)。

東南アジアにおいては、孫文は大陸・台湾双方を結びつけるシンボルになっているが、孫文が大陸と台湾の団結の象徴になるという仮説は、まだアメリカでは通用しない。

5. (付) ホーマー・リーのこ

シカゴの国父記念館の展示には、他所の展示にはなかった（だいたいどこの孫文紹介展示は似たり寄ったりである）一人のアメリカ人の肖像が掲げられていた。説明文は中国語で「随同孫中山先生到中国的美国军事学家荷馬李將軍」、その下にドイツ語で「Ein amerikanischer Militärexperte begleitet Dr. Sun Yat-sen nach China」とあり、その下に手書きの英文で「Gen. Homer Lea assisted Dr. Sun on uprisings」と書かれている。どうやら展示した時には、この人物について詳しくはわからなかったらしく、後でホーマー・リーという説明を加えたようである。

現在ではホーマー・リー（1876-1912）は、革命を応援したアメリカ人として、徐々に知られはじめている。この人物は、日米関係史において時々登場してくる人物で、日露戦後の日米対立関係を論じる際に、アメリカで日米未来戦争を題材とした小説（『無知の勇気』）を書き、警鐘を鳴らした人物として知られている。同時にリーは、孫文を援助し軍事顧問的役割を果たした、ほぼ唯一の純粹の欧米人であった。ウエスト・ポイントのアメリカ陸軍士官学校に在学したことがあったことから、軍事専門家の肩書きを持つ。辛亥革命が勃発した時に海外に滞在していた孫文は、1911年12月に香港に到着する。その一行に加わっていたのがホーマー・リーであった。この時には、日本人の宮崎滔天や山田純三郎のような海外の孫文支援者も一緒であった。

日本では熊本に宮崎兄妹記念館があり、それが孫文や革命運動の記念空間となり、また日中友好活動の場となっている。また弘前の貞昌寺には山田純三郎の兄である山田良政を悼んだ孫文の碑（孫文・唐紹儀外同志共立）が残されており、その隣には純三郎を悼んだ蒋介石の石碑もある（同寺は山田の菩提寺）。ところがアメリカにおける革命記念空間として、ホーマー・リーに関するものが挙げられたという話は聞かない。



図 14 台北ホーマー・リー墓



図 15 ホーマー・リーのサンタモニカの家

最近では、リーについては本格的な研究書も出版されてきており⁽¹⁴⁾、台湾では2011年秋に辛亥革命100周年イベントの一環として国父紀念館で「孫中山先生与美国」展が開催された⁽¹⁵⁾。この孫文とアメリカとの関係を追った展覧会では、孫文がアメリカ市民権を持っていた証拠（アメリカ移民局文書）が展示され話題をよんだが、この時に、たぶんはじめて本格的にリーの紹介がなされたのである。リーの墓は、台北陽明山の第一公墓にある。台湾にとっては、米台関係の観点から、リーが孫文を助けたことを取り上げる歴史的意味は大きく、したがって歴史記憶化の

作業が進んでいるのであろう。

しかしアメリカにおける孫文との関係の記憶や記念物は、在米華僑・華北の世界に限られる。日本のように、革命への関与が、華僑から朝野の人士に広く及んでいたところと、アメリカのように関わりが限られた遠い国とは異なる。すでに一度記したように日本の記念空間は、孫文や革命そのものを記念するものではなく、「日本（日本人）の関わり」を記念するものであるという点で国内的なものであるとも言える。そしてそれは戦前には侵略を弁護する意味を持たされていたこともあろうし、現在では、日中の対立関係を緩和する役割を持たされている。

リーの活動がアメリカにおいて記念されていないのは、その援助の効

果が小さかったこともあろうが、アメリカ史の文脈や米中関係を考える時に、まだ特に重要な意味を有していないからであろう。ホーマー・リーを顕彰することが、現在のアメリカ、および米中関係にいかなる意味を持ち得るのかは不明だが、それが必要ならいずれ記念化され、たとえば孫文とリーが密会して相談したというロサンゼルスダウンタウンやロングビーチ、リーが病気を得てアメリカに帰国し最後を過ごしたサンタモニカ海岸に近い家⁽¹⁶⁾などの、チャイナ・タウンとは異なる文脈のものが、歴史遺産に加えられることもあるだろう。そうなればやがてアメリカ人も巡礼することができる観光資源になる日がくるかもしれない。

註

- (1) 拙稿「書評：羅福恵・朱英主編『辛亥革命の百年記憶と詮釈』」（『中国研究』20号，2012年12月，麗澤大学中国研究会）。
- (2) 拙著『辛亥革命と日本政治の変動』（岩波書店，2009年）、同『華北駐屯日本軍——義和団から盧溝橋への道——』（岩波書店，2015年）、宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』（岩波書店，2007年）など。
- (3) 筆者が訪問したのは2014年8月7日、中京大学檜山幸夫教授の調査団の一員としてであった。
- (4) 日本の孫文関係史跡については、1980年前後から探索が盛んになったという。これについては久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』（汲古書院，2011年）が詳しい。なお同書への筆者の書評がある「久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』」（『東洋史研究』71巻4号，2013年）。
- (5) 王曉秋「辛亥革命前孫中山在日本和南洋革命活動的比較」（廖建裕『再読孫中山南洋与辛亥革命』華裔館，2011年）。
- (6) 邱思妮『孫中山在檳榔嶼（Sun Yat Sen in Penang）』（Areca Books，2008年，中国訳は2010年）がある。
- (7) 「孫中山檳城基地紀念館」<http://www.sunyatsenpenang.com/>。
- (8) Penang Heritage Trustによるもので、ネットからもダウンロードできる。
- (9) 2015年10月から11月にかけて神戸市舞子の孫文記念館で開催された「孫文

とシンガポール展」では、シンガポールにおける孫文ゆかりの地の昔の姿と現在の姿が写真で展示されていたので、一部の人により「ゆかりの地巡り」はなされているのかもしれない。

- (10) Yansheng Ma Lum (馬充生)・Raymond Mun Kong Lum (林文光)『ハワイにおける孫逸仙：その活動と支援者たち』(ハワイ大学出版会, 1999年)。
- (11) 「世界の孫文記念館 (その3: アメリカ・サンフランシスコ)」(『孫文記念館館報』第3号, 2009年6月)。
- (12) Rand Richards, “Historic Walks in San Francisco: 18 Trails Through the City’s Past”, Heritage House Publishers, 2008.
- (13) <http://chicagochinatown.org/> よりダウンロードできる。
- (14) Kaplan, “Homer Lea: American Soldier of Fortune” The Univ. Press of Kentucky, 2010.
- (15) この展覧会は実見した。図録として『孫中山先生与美国』(美国在台協会・国立国父紀念館, 2011年)がある。これは天川晃先生にいただいたものであり、先生に感謝申しあげる。
- (16) 現在も残っているかどうかは不明だが、少なくとも2012年2月までは残っていた。ただし家の前の電信柱に、取り壊す予定だという通告が貼られていた。

(補註) 筆者は本稿の初校期間(2016年2月)に、再びアメリカ西海岸(バンクーバー、サンフランシスコ、サンノゼ、ロサンゼルス)の孫文関係史蹟を訪ねる機会を得た。それにより本文を多少訂正した。これらを実見してみてわかったことは、その多くが台湾・国民党関係者によって作られたということである。サンノゼに至っては、孫中山記念堂と中正紀念亭がセットであった。ロサンゼルス中華街のセントラル・プラザの孫文像建設の経緯はわからなかったが、街の様子からは、「海外紀念空間」で言及のある中華会館傘下の26個の下位会所というのは、政治的には大陸系ではないような感覚を受けた。孫文だけを取り出して論じるのは誤りを生みやすいということである。在外華人の歴史意識を探るには、また他の記念物についても見る必要があるという感触も深くした。その点で、サンフランシスコの米国華人博物館の展示が、孫文関係のものではなく、中国人のアメリカ西部開拓への貢献展示と、1915年前後の民族差別展示であったことは、

興味深い。またバンクーバーやロサンゼルスなどの中華門の建設が、在外華人の協力によってなされていることに気づいた。歴史性や政治性の薄そうなところで、華人意識の統合がなされているのである。さらにこれは改めて紹介すべきだと考えるが、一年前にはなかった海外抗日戦争記念館という博物館がサンフランシスコのチャイナ・タウンの中心部に出現していたことも注目に値するだろう。この記念館は戦争勝利 70 周年を契機に作られたもので、抗日の歴史展示と、海外華僑の協力、さらにアメリカの援助が語られている。歴史意識としては、反ファシズムという点で、アメリカ人と中国人は協力した点を強調しようとするものであった。米中親善の狙いが見える。ここには政治性も感じられる。その他に注目しなければならないのは、在外華人と地元民の協力による土地の繁栄を記念碑であろう。

※本文中に掲載した写真は 06 を除き筆者の撮影によるものである。

〔付記〕本稿は主に平成 25～27 年度麗澤大学経済社会総合研究センタープロジェクト「東アジアにおける史跡・文化と観光開発の諸問題について」（研究代表者松田徹、共同研究者堤和彦・汪義翔・邱瑋琪・櫻井良樹）による研究成果の一部である。また檜山幸夫氏を研究代表者とする科研費基盤研究（A）課題番号 24242026「現代のおよび世界史的視点からみた日本の戦歿者慰霊に関する総括的研究」による研究成果の一部でもある。